

編集の序

繊細な感覚を有し、俊敏で正確な動きを行う「手」は、私たちの生活に不可欠なものである。科学が飛躍的に進歩し、バイオリンを弾くロボットが開発された現在においても、手と同様の機能をもつ巧妙な機械を作り出すことは困難である。この緻密な構造、機能をもつ手を最大限有効に働かせるためには肘関節・肩関節の働きが不可欠である。これらを扱う上肢の外科学は、第二次世界大戦以降に急速に発展・進歩した学問であり、本邦においても臨床的および基礎的研究が大に行われ、世界的な業績を数多く出している。

この上肢の外科学は整形外科学の一分野ではあるが、対象の特殊性や専門性の高さから一般整形外科医のなかには上肢疾患に苦手意識をもつ先生も多い。一方で、十分な知識をもたないままに安易な治療を行った結果、残念な結果を招いてしまうケースも散見される。確かに上肢疾患のなかには治療に際して非常に高度な専門的知識・技術を必要とする症例もある。大切なことは治療にあたる医師が上肢疾患についての十分な知識をもち、どこまでは自分で治療を行うことができるか、またどのような状態であれば専門医にコンサルトすべきか見極める力をもつことと考える。

本書では多岐にわたる上肢疾患のなかから「整形外科卒後研修ガイドライン」に沿って、日常診療する機会が多く、整形外科専門医として必ず知識を身につけておくべき疾患をとりあげた。つまり、学生教育用の教科書と異なり、すべての疾患を網羅することにこだわらず、臨床において大切と思われる項目、疾患に重点を置いている。執筆は現在、臨床の最前線で活躍している指導医の方々をお願いし、病態、診断、治療などについて重要事項を中心にまとめていただいた。また、「思いがけない落とし穴」、「指導医の教え」、「専門医にコンサルトを要する場合」などの項目を設けて臨床にすぐに役立つ応用的なことも解説していただいた。さらに、「知っておきたい最近の研究」では当該疾患に関する最新の臨床的および基礎的研究についても記述していただき、各項目の最後に掲載した参考文献を参照することにより、より高度な知識を習得することが可能となっている。

本書は研修医のみならず上肢の外科学に関心のある整形外科医や形成外科医、また上肢の外科学に関する知識を深めたい看護師、作業療法士、理学療法士などコメディカル・スタッフにも役立つものと考えている。さらに本書は上肢の外科学を専門とする先生にも手近な参考書として利用していただけるものと思う。本書が上肢疾患の理解を深めることの一助になり、そして診断・治療に大いに役立つことを心から念願する。

2011年6月

池上博泰
佐藤和毅